

高槻病院における結石破碎の現状

松嶋 昂介、吉田 有希、郷司 和貴、西田 剛、右梅 貴信
(愛仁会高槻病院 泌尿器科)

2019年から2021年までに当院で尿路結石に対して手術療法を施行した症例について成績を検討した。当院では尿路結石に対して体外衝撃波結石破碎術(ESWL)と経尿道的尿路結石除去術(f-TUL)を施行している。対象は上記期間に当科でESWLを施行した264例と、f-TULを施行した132例を比較検討した。患者背景では、高齢、ECOG-PSが不良、場所(下部尿管)、大きさや尿路感染の既往歴がある症例で、f-TULが選択される傾向であった。ESWLでは衝撃波発生装置をDornier社製(Delta II®)、f-TULでは軟性尿管鏡をBoston社製ビデオスコープ(LithoVue®)、破碎装置をBoston社製ホルミウムヤグレーザー(VersaPulse®)を使用している。

f-TULはESWLと比べて手術時間が長くなる傾向はあるが、初回のKUB撮影で高いStone free ratioを認めた。しかし、最終的には共に良好な成績であった。術後の合併症として、術後感染症や尿管損傷があり、症例によっては複数回の治療が必要であること、重篤な合併症の起こりうることに留意が必要である。